

第5回国際観光都市としての機能整備に関する研究会
議事要旨

1 日時 平成30年3月26日(月)午後1時から午後2時20分まで

2 場所 アイリス愛知2階 コスモス1、2

3 出席者(敬称略・五十音順)

【委員】

井澤 知且(名古屋学院大学現代社会学部 教授)

内田 俊宏(中京大学経済学部 客員教授)

黒田 達朗(名古屋大学大学院環境学研究科 教授)

林 大策(愛知淑徳大学交流文化学部 教授)

水尾 衣里(名城大学人間学部 教授)

村上 心(相山女学園大学生生活科学部 教授)

※ 林大策委員は欠席(研究会前に意見聴取を行った)

【オブザーバー】

常滑商工会議所

牧野克則会頭、澤田研一副会頭、富田博夫会員

4 議題

これまでの議論のまとめ

5 議事概要

事務局から資料について説明するとともに、研究会としての取りまとめを行った。

主な意見は次のとおり。

委員等からの主な意見（概要）

【国際観光都市としての機能整備に関する研究会 これまでの議論のまとめ】

（井澤委員）

- パワーポイント資料は、議論の内容を幅広く拾っていただいた内容になっている。
- （8 ページ）今後、自動車産業は電気自動車にシフトし、産業の構造転換が急速に進むのではないか。これに呼応する形で、新たな産業を興したり、ベンチャーを支援したりといった実験エリアを設置するなど、産業の構造転換をうまく促進するために、ここで示された「モデル未来都市」に積極的に取り入れることができないだろうか。
- 建物等の構造物（ハード）は長い間もつが、情報通信技術などは日進月歩である。施設を建設する際は、将来を予見し、新たな情報通信技術等をその後も導入できるような仕組みを最初から施設に組み込むことが求められる。
- （9 ページ、10 ページ合わせて）大規模な投資をする際は、空港島・対岸部にとどまらず、その投資効果をどこまで広く波及できるかが最大のテーマになりうる。今後のテーマとして考えていくべき。
- （11 ページ）こうした新しい事業は大きなインパクトを周辺地域に与える。くれぐれも事業主体が責任をもって丁寧に説明し、地域の声やニーズを把握した上で推進していくことが大前提である。
- 富裕層についても、取り込んでいく方法を考えていく必要がある。

（内田委員）

- まとめ資料は、これまでの研究会の議論を集約しており、方向性としてはこれで良いと思う。
- いくつか補足させていただくと、ギャンブル依存症の懸念もあるので、メインターゲットはあくまで訪日外国人であるということを強調すべきだと思う。
- （9 ページ）県の観光分野の産業観光、武将観光などと比較すると、醸造文化は少しピンポイントすぎる印象。地場産業という意味では、常滑の焼き物文化などもあるので、整理の仕方として、同じレベルでまとめてもいいのかなと思う。
- （9 ページ）下段に観光資源の例が掲載されているが、航空ミュージアム以外は、自然や景勝地といった、どちらかというと国内シニア層向けのイメージの観光地が並んでいる。訪日客向けには、体験型コト消費をアピールする方が望ましく、例えば、アニメツーリズムや最先端技術や産業史のトヨタ博物館や

産業技術記念館、乗り物観光としてのリニア鉄道館、国内唯一の屋外型レゴランドなど、訪日客を意識したコンテンツにすると良いと思う。

- (11 ページ) 国が目指す日本型 I R ということで、国への提言・アピールとしては、県が整備している国際展示場の重要性が増してくる。コンセッション優先交渉権者がフランスの G L イベントズのグループに決まったので、先進的に外資の民間資金の活用を導入しているという点、海外に一定のマーケットを確保しており、確実に顧客の取り込みが狙えるという点は、国へのアピールになる。
- また、国も地元の理解、ノウハウを重視する可能性が高いので、例えば、常滑には競艇があり、ある程度理解やノウハウがあるといった内容も、場合によっては組み込んでいってもいいかもしれない。九州のハウステンボスで言えば、中にウインズの馬券売り場があるし、テーマパークとして訪日外国人旅行者の取り込みに地元の理解やノウハウがあるといったことが言えるだろう。

(水尾委員)

- これまでの議論がバランスよくまとめられている。
- 他の I R を考えている地域との違いとして、自動車やロボットなど技術で勝負していくということは、もっと強調してもよい。また、時代を先取りをした書き方も必要かなと思う。自動車産業、ロボット産業と分ける書き方は、既に古いのかもしれない。自動車を製造しているところはロボットを造り始めるだろう。
- I R というとエンターテインメントの高さも重要だが、この範囲でできることを考えると、先端技術を活用した日本の M I C E の拠点として認知されることが必要。そうした部分を強調して書くことが望まれる。
- (9 ページ) 岐阜県、長野県、富山県などは、この地域からの鉄道アクセスはあまり良くないが、道路アクセスの良さで、北陸地域とこの地域は密接に連携していける可能性が高い。外国人にとっても北陸地域は魅力的で、中部地域とは違った魅力があり、向こうの期待幅も大きいだろうから、中部のみならず日本海側の県も含めて、協力・連携が意識されるとより充実するのではないか。
- I R に含まれるカジノのギャンブル性については、慎重に考えるべきである。I R に含まれるというのを前提に、ここまで検討を進めてきてはいるが、これから県で議論する場合、そこだけは慎重に検討するという姿勢を打ち出しても悪くないと思う。また、カジノは地域性としてはあまりフィットしないようにも感じる。

(村上委員)

- 非常によくまとまっている資料であると申し上げる。
- (8 ページ) モデル未来都市という表現は非常に魅力的でワクワクする。どういう未来を描くのかというのは、本会議では議論していないが、ここをどう詰めるのかは重要な点。この資料では、20 世紀に発展した今ある産業が軸になっているが、技術だけでなく、技術が支える人間の心、あるいは地球を伝えていく心があり、未来の暮らす都市の姿は変化していくのではないか。自分たちが物質的に豊であるために働いてきたという姿から、うまくロボットや人工知能に任せながら、本来我々の時間の過ごし方がどうあるべきかを考え、その豊かさを見出すという方向性もある。そこを未来都市としてどう描けるかという要素は、日本の魅力としても重要な点であると思う。
- (10 ページ) コンシェルジュは空港島に設置するイメージだと思うが、未来を考えると、人やロボットがやるとか、ワンストップで情報が得られるコーナーがあるといった、場所やモノに縛られるものではない。愛知県は、この東海地方や日本を代表する情報のゲートウェイとなり、その中で空港島がどう結びつくのかを考えていかなければいけない。空港島という場所に拘ることなく、情報通信技術等を利用して、転嫁していけると良い。
- I R については、税金投入なき公共事業を担保することと、住民の理解を得ることの2点を条件として、具体的検討をすべき。ただ、この条件については慎重にならないといけない。今後、I R の手法を導入する場合には、どのような公共投資になるのかを考えていかなければいけない。

(事務局から欠席委員(林委員)のご意見紹介)

- 愛知県の I R がどのような特色を持つべきかということを考える必要性があるが、もう一方でどのような I R であれば地元住民の理解を得ることができるかという視点も必要である。その意味では、I R での利益をどのように地元還元するか、例えば、伝統工芸、芸能の継承予算などという方策も今後考えていくべきかと思う。

(内田委員)

- 補足だが、空飛ぶ車の開発について、経産省がスケジューリングを組む協議を始めようという状況。開発拠点が愛知県と東京ということで、県内では中山間地域の観光に使うというイメージで、モデル未来都市のイメージにも合致するので、紹介してもいいかもしれない。

(黒田座長)

- 事務局におかれては、本日も追加の意見、要望が出たので、来年度、さらに I R も含めて検討していく中で、考えていってほしい。

【国際観光都市としての機能整備に関する研究会「取りまとめ」について】

(黒田座長)

- 今日は最後の研究会であり、この後知事にも報告をするので、事務局で取りまとめの案を作成していただいた。委員のご意見を伺う。

(井澤委員)

- 内容は問題ないが、この資料は広報的にどのように利用されるのか。
(事務局より、「知事へ報告していただく際に報道へ提供する。また、県HPへ掲載させていただく予定である」と回答)
- 新しい取組にチャレンジしていかないと時代に取り残されていくし、地域の発展も見込めない。チャレンジする姿勢はどんどん出していくべき。しかしその際、一方的に進めていくのではなく、地域の意見を聞くこととセットで進めていくべき。

(内田委員)

- 資料に関しては異論ない。
- I R を愛知県に整備する必然性を国へアピールする段階では、国際展示場のコンセッション優先交渉権者がフランスの G L イベントに決まり、確実に一定の M I C E を呼ぶことができると言える。一方、その後のリゾート需要を京都や東京にとられるのか、それとも愛知県、名古屋、常滑に落ちるのかが重要になってくるので、今後、その辺りまで詰めて、強調していけるとよい。

(水尾委員)

- 資料について申し上げることはないが、今後、県と常滑市の役割分担がどうなっていくのかを教えてほしい。
(事務局より、「空港周辺の機能整備は県が責任をもって検討を進めていくが、地元調整については市の力を借りて、意見交換をしながら進めていきたい」と回答)

(村上委員)

- 資料について特に意見はない。

- 先ほど申し上げた内容になるが、I Rの活用については、やはり常滑市、愛知県、東海エリアの住民の理解を得るようお願いしたい。もう1つは、公共性を担保すること。これがないと、ただカジノで儲けるだけになってしまう。後は、リスクをどう管理し、対処するかということ。ここを前提として、I Rは活用できるならした方がいいし、もし活用しなくてもこの研究会の議論は県、市で進めてほしいと思う。
- 一方、I Rを活用するという事ならば、国や、先行してI Rに手を挙げている他都市の状況をみると、愛知県は非常に遅れている。やるからには、しっかりと誘致した方がいい。
- 公共性の担保をどう具体化するかなど、おそらくI Rの仕様書等になってくるものなので、常滑市とも協議する必要がある。こうした具体的な検討を一刻も早く始めて、新年度早々、検討委員会等をしっかりと立ち上げ、そこで具体的な案を早急に作るといった作業を進めていくことが必要ではないか。
- その際、自主的に案を出してくれる民間企業もいると思うので、県の主導ではなく、民間、経済界の支援、活用も含めて考えていただきたい。

(事務局から欠席委員(林委員)のご意見紹介)

- 地元の理解を現状では得られていないことが今後の大きな課題である。メディア対策も含めて、I Rのあるべき姿の議論とともに、今後協議していくべきと考える。

(常滑商工会議所 牧野会頭)

- 今後具体化に向けて、引き続き議論が進むことを期待している。
- 県の取組について、会員の皆様には理解いただいているが、今後は地元全体の理解につながるよう、経済界として取り組み応援していきたい。
- 空港島と対岸部をモデル未来都市として総合的に発展させていくことにより、常滑全体が焼き物や酒蔵などの伝統産業と一緒に、I T、環境都市に生まれ変わっていくと思う。そのためには、当該地域が特区的に位置付けられ、活用されるような法的整備も含めて環境を作り、中部のリーディング企業が当該地域を実証試験や新商品のアピールの場として最大限活用してもらえるようになればと思う。

(黒田座長)

- I Rについては、国の方で整備箇所数や入場料など、まだまだ協議が続いているようであるが、アメリカの企業などは大きなビジネスチャンスと捉えている。大規模な投資が入ってくるかもしれないので、良くも悪くも大きなきつ

かけになるので、うまく活用してほしい。

- 一般の方が心配されるギャンブル依存症の問題について、ラスベガスの地元のネバダ大学には専門の研究者がおり、依存症のケアを地元として真剣に取り組んでいるようである。国においては、ギャンブル依存症対策をパチンコ等も含め包括的に検討しているようなので、愛知県としてもこうした動きを見ながら、IRを推進するのであれば乗り遅れないよう準備を進めてほしい。

【(参考資料) 国際観光都市の機能整備に係る平成 30 年度当初予算の概要】

(水尾委員)

- 引き続き調査検討されるということだが、真剣にやるには額が少ない印象。常滑市においても、本気でやるならしっかり頑張ってもらいたい。
- IRといえばカジノというイメージは定着しており、色んな方が心配しているので、先ほど申し上げたとおり慎重に進めていただきたい。
- 外資が入ってくることで、日本の資金を海外に奪われるのではなく、逆に海外からしっかりと外貨を獲得していけるよう、進められたい。

(内田委員)

- カジノはどうしても周辺地域の治安悪化のイメージが強い。そのため、ラスベガスはセキュリティも非常にしっかりしている。治安に関する不安を除去するための情報収集、分析なども進めていただければと思う。

(村上委員)

- IRを進める場合、国の動向にもよるが、この事業内容を1年かけてやっていると手遅れになる可能性がある。この事業内容は、夏前にはまとめるくらいのスケジュールで進められると良い。